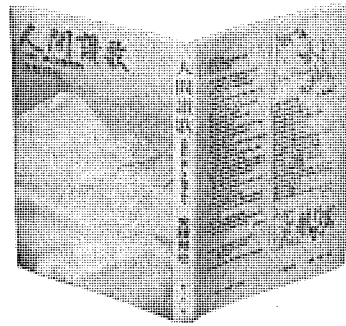


安積得也君の新著

「人間讃歌」について

東京 松本兼二郎



美しい表紙の裏側に掲げられた著者一九二七年の作詩を読んだ筆者は愕然とした。一九二七年といえは著者二十七歳の時である。時は正にナチの勃興期である。このような時期に、このような詩を書ける人が、老若男女を問わず果して幾人あつたであろうか。

本書を一貫して流れる基本理念は人間の尊厳である。そしてその源をなすものは「未見の我」（人皆に美しき種子あり）という著者独特の考え方である。

本書は春夏秋冬の四篇に分かれているが、その主体は秋篇である。秋篇は、著者が底窓、横窓、天窓と呼ぶ三つの窓について詳述している。底窓とは自分を見つめる窓である。自分の知らない自分、未見の我を見つめる窓である。横窓とは他人と社会を見つめる窓である。その

窓をあけて自分以外の一切の他者を、思いやりの心を以て見つめる。それが横窓である。美点凝視の窓である。思いあひ分かちあいの窓である。横窓をあけてみんなの知らないみんなに合掌したい。ヒューマニティと人類文化の可能性の雨が人類同胞と明日の子孫のために降りそそいでいる。それが横窓である。然らば天窓とは。それは人間を超える者との対話の窓である。底窓、横窓はいずれも人間関係の窓である。しかし人間という天の秘蔵つ子の無限可能性を開発するためには、われわれのあける窓は底窓、横窓の二つだけでよいであろうか。「それだけでは不足である」という内なる声がする。その窓を私は天窓と名づける。それは人間と人間を超えるものとを結ぶ窓だからである。著者は更に続ける。底窓選択テーマは「現在のわれか未見の我か」である。横窓選択テーマは「ひとり生きるかともに生きるか」である。そして天窓選択テーマは「人間関係一本槍か人間を超えるものとの対話か」である。

ロータリーはその性格上最初から横窓をあけるためにのみ全力を尽したが、今やその範囲を拡げて舞台を全世界人類にまで拡げようとしている。今後は更に広い範囲に横窓を拡げる方向に向かうのではあるまいかと私には思える。その次の段階で更に天窓をあけるところまで歩を進めるかどうか、今日これを窺い知ることは

できない。ロータリーというものは飽くまでもデモクラシーにのつとる組織体だからである。本書は本来ロータリーを対象として書かれたものではないが、私は本書を以て全ロータリアン必読の書と考えるが故に敢て本書を皆様に推奨する次第です。

(バストガバーナ・耐火煉瓦製造)